特116
686

紅葉狩

2-5

172
301

始

特116
686

紅葉狩　内巻之貳ノ五

此曲前ハ艶ニシテウツキリト後ハ凄ミニ強ク謡フベシ

役別			
前シテ	女	ツレ	侍女三人又ハ五人
ワキ	平維茂	トモ	従者大勢
後シテ	鬼女		

九月

類別			
五番目（鬼物）			
處	信濃國上水内郡戸隠山		
前シテ	面増（近江女ニテモ）	鬘	鬘帯
	鬼扇持		
ツレ三人又ハ五人	面遠面	鬘	鬘帯
襟赤	葛扇持	着附摺箔	赤地唐織着流
ワキ	梨子打烏帽子	白鉢巻	着附厚板
扇指シ	弓矢持	長絹	白大口
トモ	人數定マリナシ大勢程宜シ	着附厚板	紋付腰帯
	内一人太刀持	素袍上下	小刀
後シテ	面顰（又ハ獅子口）	赤頭	赤地鉢巻
	縫紋腰帯	襟縹色	着附假厚板
		打杖持	法被
			半切

大正
5. 11.30
内交

一一枚表行　次第二段「時雨を急く紅葉時」シテツレ連吟サラリト「是も洪あるとりよ住む女ゑゑゐ」ト開カニ「実やあぐらへて」ヨリシテツレ連吟サラリト「鳴りそめ〜きゝ〜き言」ト開カニ「伴ひ出る」トサラリト「下紅葉」モ子バラヌ様ニ「皆やもゝ紛へや」ト開メル心ニテ謡フ

一二枚表行　一声二段本越「面白や此方長月」トサラリト確リト謡ヒ出シ「明ぬとて」サラリト「またらをゞ」初同サラリト「遁れさの〜紀よ」ト開メル心「責くる庚乃」ト元ヘ戻シ「風のゆく雲も心をゝよ」返シ開メル心ニテ謡フ

一三枚表行　「いのゝ紀ゝあゝ」ワキノ詞ハ開カニ確リトトモノ詞ハサラリト「馬より打りて」ニノ同ハ気ヲ受ケテ確リト謡ヒ「てゝろづゝひぞたぐひあき」返シ開メル心ニテ謡フベシ

一四枚表行　「ぎるや数あらぬ」以下シテハ開カニワキハサラリト「ゆゝ情あの」トカゝツテ「樹乃陰よ」モカゝツテ「河乃流き」地ハ受ケテノンビリト「我よ来ぞり留むき」ト開メル心「さたゞ」ト受ケテ出デ「芋〜わゝべき」ト開メル心ニテ謡フベシ

五三枚表行　「実やてきいを」クリハサラリト謡ヒ「林間よ酒を」トサシハ開カニ「胸うちわぐ討あり」ト開メル心「されきてふ人心」曲ハ開カニ出デ「尚へバわゝる心ぶ」ト開メル心「されべ紅葉」ヨリサラリメニ謡ヒ「よ〜や思へべ」上端ハ開カニ「荷世乃奚り」ト地ハ受ケテ「立ゝづらへれ氣色ゝ春」ト開メル心「のゝ〜〜時刻も」ト気ヲカヘテサラリト謡フベシ

中之舞五段

六枚裏行　「恐ぎ紅葉青苔の地」トシテハ乗ラズニ返シノ地ヨリ乗リテサラリト「月結移の」ヨリ乗ラズニ少シ開メテ「夢ぎ〜さまし〜紛ふあよ」返シ開メテ謡フベシシテハ造物ノ中入スル

七枚表行　「あら清き〜や我あゞら」サラリト確リト「琴く花よ」ヨリ進ム心「れぼつゝあ〜や」ト少シ開メ「ふ〜ぢや」ヨリ乗ッテサラリメニ謡ヒ「やうぞあき」ヨリ働（又ハ無シニモ）

八枚表行　「これをちかもさわがにして」ワキハ開カニ出デ「微塵よあちんと」ヨリ漸々進ム心「あゝろ〜きれ」ト開メル心ニテ謡ヒ納ムベシ

小書　鬼揃　曲舞ノ應答

紅葉狩

謡人

時雨と共に紅葉狩

路と尋ねて

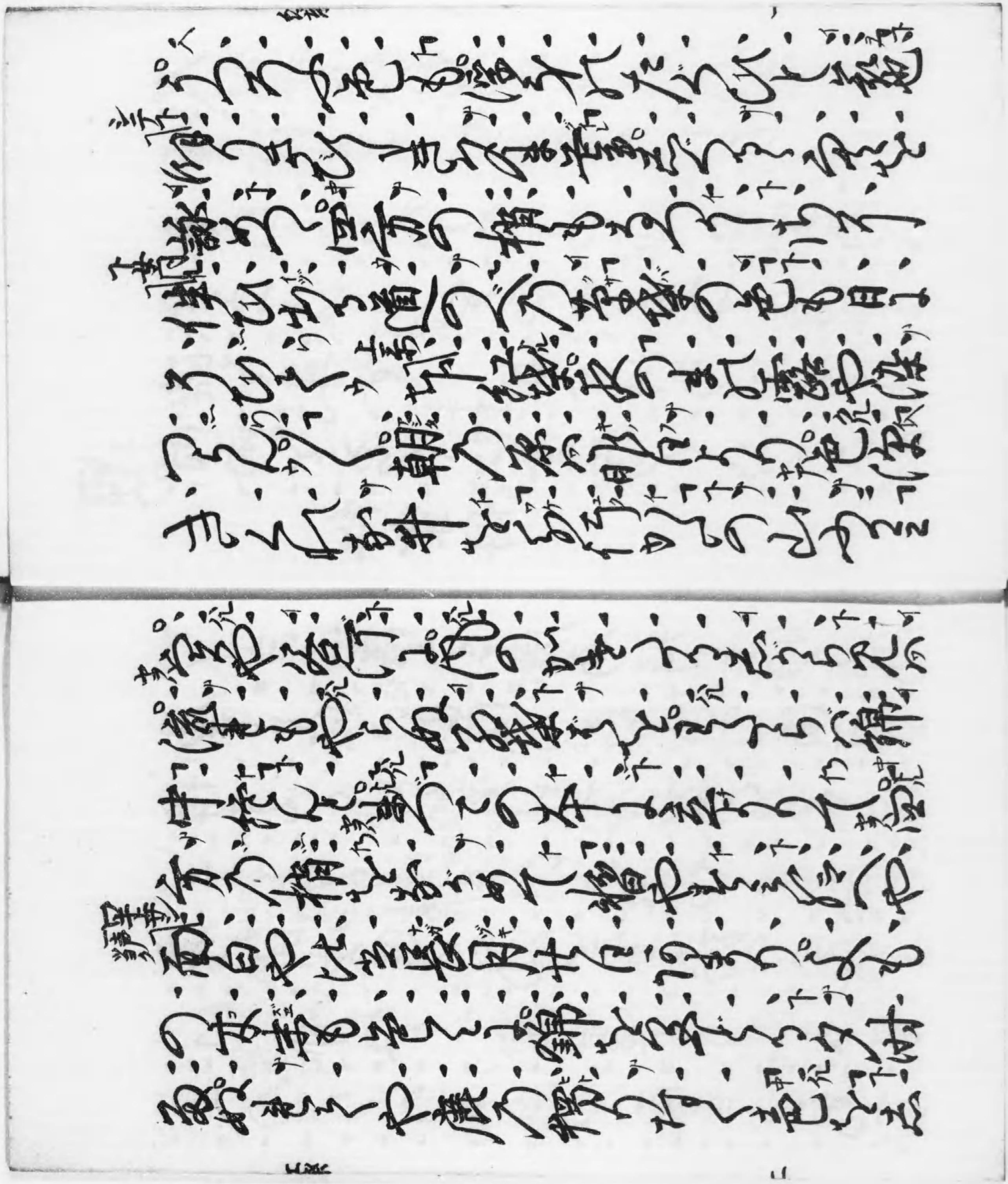
女房達

白雲八

重箱

宿のしるべ

人数



ゆくべうらのもとに立て白き氣色
なれ　月ぬとて　時鳥より山よりいる後
鹿の聲　次第に遠くなる風の音　蛩の哭
ぬ　月　上の月　山もとの　やうを心の
梢　野　薄　霧　行
屋もとほきに　陰　垣　道
きよ　落る　庵　拜

のゆく海　心をよく　いて誰
ある　前　山陰　當
つく人　影　みゆ　者　名
と尋て　人　名　て　名を　て
へやごとうさ　上　簾　幕　ちまの
屏　たく　酒宴　みて
行よ　愁　尋　そ　ぬ　ぬ

ゆはさるは御方と討せしは　ワキ　哀なりき
や此あたりなる人の思ひも
よしやよし知らぬそむしあまた上﨟
乃道の辺の紅葉狩酒宴のお
かしならばかく案内申すとかまじと
馬より下りて沓をぬぎ道を隔て
て山陰の岩のかけ路をたどりかへりつゝ

づらひぞたゞひとりあかぬ　シテ女上　げにや
知らぬ身の山の奥までも人の
志らじとうちとけて独り遊ぶる紅
葉ぞのいろみてきるかいかよを昔
ワキ上下　我当能たまらん友弓ゆだやごとあき
はるかはれて君が討也　女　志なぶ
もちぞり誰ぞたゞしらせ給ぬ道

のべの使に立より給へかし　思ひもよ
らぬ御事や行しに我もとめ給ふ
べきにもあらぬやうそてるとかく　女「なから
情ある御事や　一村雨の雨宿り
一樹の陰に　女「立よりて　一河の流
れを汲む酒とも　いふで見せて給ふ
べきものを　つれなくも　袂をよそがり

留むべき言葉も岩木にはあらぬ我心
よわくも立寄る南山路の菊の酒
何か苦しかるべき　かゝやこきいと
古へも心ありとも拾かづきし人の
情の盃の深き契りの様しらや
林間に酒をあたゝめて紅葉をたく
とかや　あら面白の折からや岩ほの上

はてけ蓬のもとにく袖も紅葉衣乃
くれなゐ井深き色にしぬべきの洗世の人
たゞ思ひきゝ所ゆゑ脇うちちらわゝ計ぞり
さゝ野きゝ所ゆゑ人ぞ竹の
世のつゆ計だにとゝ思ひ
いかゞも盃に高べかりる心ぞ
ゆめ道の様ゝ計ぞ

欲酒とやゝ有べ邦嬢言詰きゝろ
たゝ花ゝ花ゝ
世も世ゝ
見ゝめもいゝ
とても前世の
き情ゝ色みて
ゝの草世の露

ぞ頼ゆかく末とちぎりもたれ
うちつもるとしの心もたちそめし
ふるさとの乱れもうかくて時雨も
うつりゆく雲よ見の色をたちそめ
かまちきの首城の外の芦の
ちりぬるとて月の面ちも紅もをと
めぐらし秋ぞ紅葉城と紅

堤に青苔の地上堤に紅葉をいたの地
ゆ見る宮殿苔ゆくそよ多うちうく
ゆ見る宮殿の地上陸に陸に月の秋
狩のうたねよ〜〜独もつまふ
うし夢ゆ学ゆ絵よ多ゆよ〜〜中人未序
酔心ゆまどろ学ゆ陸もまの中よゆらる

時ならぬ夢の告と　北斗に近く枕よ雷
火乱れ　天地も響きに　もちてち
ひびくも　只　山中よ　ぼつうち
しやうの屋　きやうきやうと　ふるる
あくびに　生の法を　動かす　ひの
岩ほよ　火焔を　放ちぬ　庫裏よ
ろのほとぼし　咸陽宮の　煙の中よ

天の屏風　よるぼ　脱ぎて　其
たまし　火の　光　邪　角かいぼく　眼
きの月　面をも　くべきやうそなさ
れもち　水　もさわぐして　維義
をこ　もさとぎ　給ひ　南無や　幡
大菩薩　心よ　入　鉢　ぬいて　侍
かきぶ　べ　撥　よ　ぶ　んと　ぶ　で

313
361

復製不許

大正五年十一月廿五日印刷
大正五年十二月一日發行

訂正著作者　觀世元滋

京都市上京區二条通麩屋町東北角
發行兼印刷者　檜常之助
（電話上二千百九十番）
（振替貯金大阪三千六百八番）

東京市四谷區傳馬町貳丁目十九番地
印刷所　江川堂
（電話番町八六一）

終